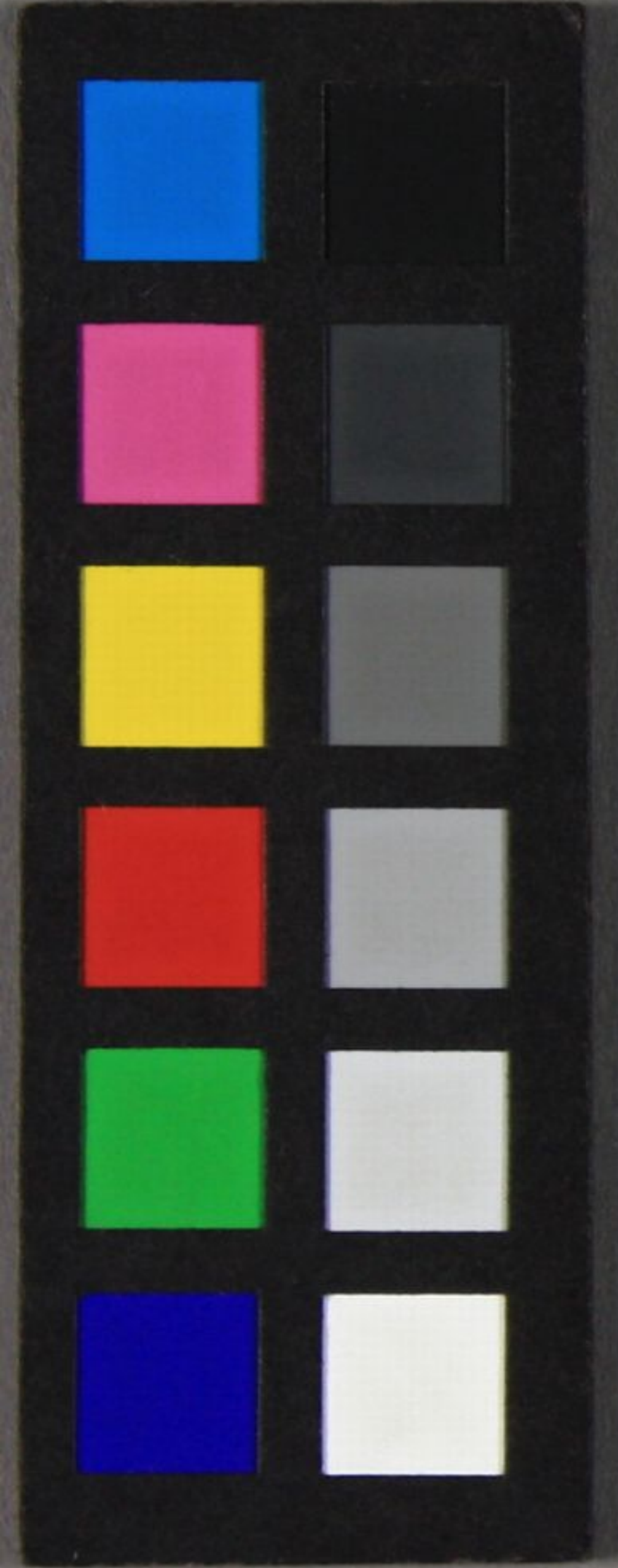
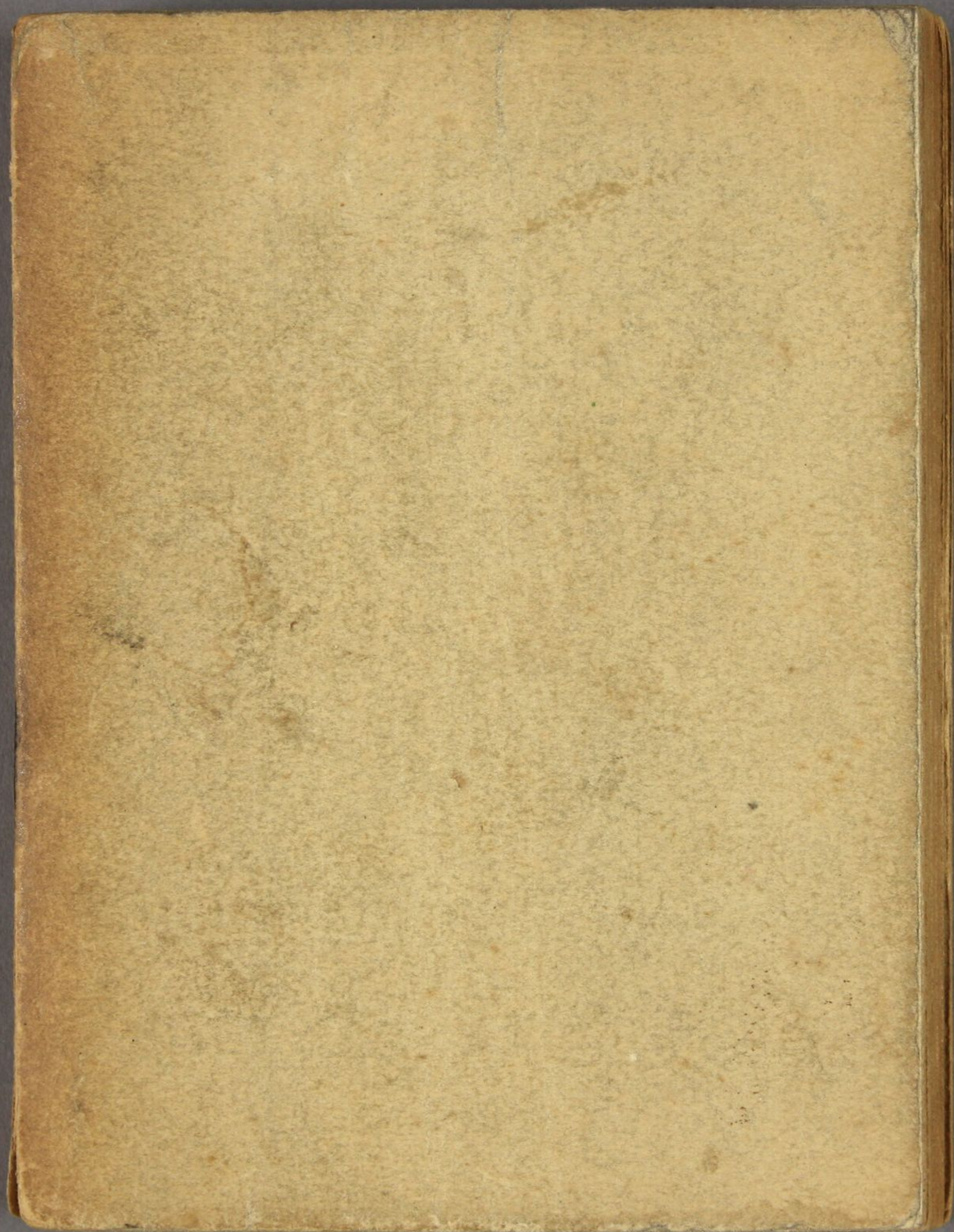


天葉詩集







天葉詩集

白鳥天葉著

少年少女詩集

和田英作裝幀

京東

新少年社

東京市牛込區矢來町

石
石
石 葉

はしがき

詩しの領土りやうどは無む限げんなり、われ詩作しさくに身みを委ゆたね
てより既すでに十じゅう年ねんにちかし、最さい近きんことに興きようふか
く感かんずるは、森羅萬象しんらばんしやうをあどけなき音律おんりつの裡うち
に表あらはし、また少せう年ねんの至し純じゆんなるこゝろを杳はるか

に恩ぶことなりき。

今、雑誌『新少年』誌上に発表せるものを中心とし、未だ世に問はざる數十篇の詩を加へて此の一卷を成す。凡て少年の美しくしき情緒と、勇壯なる士氣とを最も高揚せんと欲したれど、茲に其の幾分を達したるや否やは覺束なし。

終りに畫伯和田英作氏が此の詩集のために特に装幀の勞を執られたるを深謝す。

大正五年春

東京郊外にて

白鳥天葉

序詩

都みやこを百ひやく里りふるさとの
空そら美うつくしく花はなさけば、
そそるるに歌うたふ春はるの鳥とり。

春はる三さん月げつの雪ゆきとけて、

山紫やまむらさきに匂にほふころ、
わがふるさとに啼なく小鳥こどり。

天葉詩集目次

少年の春……………一
雲雀……………三
南の空……………九
小さい靴……………一
兔……………三
高い高い……………一五

あこがれ	二七
女王	一九
蜜蜂と牛	二二
籠の小鳥	二四
春の畑	二六
太鼓と堇	二八
月と星	三〇
蟻と蟋蟀	三三

美しい角	三四
魔法使と小娘	三六
カナリヤと蜘蛛	三八
上野の鶯	四〇
蝙蝠	四三
シヤホン玉	四五
小さい町の鐘	四八
燈臺守	五〇

劔と血

天空の獨逸魂……………五
 血染の風車……………三
 カイセルの夢……………七
 潜航艇の狂暴……………七
 殪れし戦友……………六
 凱旋の將軍……………八

肉彈の歌……………六
 砲彈と勿忘草……………六
 暑い行軍……………七
 光彈……………九
 日章旗下の二兵士……………〇
 リインの悲劇……………二
 巨彈の上に……………六
 世界地圖……………一〇

珠玉集……………一〇七

郵便脚夫……………一〇九

雪達磨……………一一二

兔狩……………一一四

竹馬……………一二六

雀……………一二八

空氣銃……………一三〇

東北大飛行の歌……………一三三

ペルリ記念碑……………一三四

夏の夜の笛……………一三九

故郷小曲……………一三二

新少年の歌……………一三五

花鳥吟……………一三七

椿……………一三七

鶯……………一三九

蒲公英……………一四〇

喙木鳥……………一四二

石斧……………一四四

雪の馬上に……………一四七

星の曉……………一五〇

山彦……………一五二

向日葵……………一五四

海邊スケッチ……………一五五

入江の釣人……………一五五

波間の金華山……………一五七

逗子の夕……………一五九

千鳥……………一六〇

男兒頌……………一六三

日本國民の歌……………一六五

太平洋の捕鯨……………一七四

「雄飛號」の上から……………一八二
 高原の駿馬……………一九〇
 夜討の五月雨……………一九七
 大江の岸……………二〇一
 鷺と飛行機……………二〇五
 櫻の別れ……………二〇九
 嵐の航海……………二二二
 噫、乃木將軍……………二二六

生立ちの記(散文)……………二三二

山の搖籃……………二三三
 雪の夜がたり……………二四一
 幸福の森……………二五七

装幀……………和田英作

天葉詩集目次終

少年の春

雲雀

春の光のうれしさに

雲雀は今日も啼いてゐる、

絹のやうにも柔らかかな

崩えづる麥の巢を出でて……。

雲雀は今日も思ふやう

高いみ空の太陽へ
あの美しい太陽へ
飛んでゆきたやはるばると。

空の高さは幾千里

ピッチ、ピッチと啼く雲雀、

太陽國に着かぬうち

いつも眞赤に日が暮れた。

たとへば大臣大將を
太郎が望むそのやうに、
毎日、雲雀さん
太陽めがけて飛んでゐる。

あゝ感心な雲雀よと
太陽國の王様は

ある日雲雀を側近い
黄金の椅子に召しました。

王様雲雀に問はるゝは
人間世界の出来事を、
何か話して見るがいゝ
褒美は望みのまゝにやる。

雲雀よるこび答ふるは
世界の人は剣を磨ぎ、
戦事に身を忘る
平和の鍵を賜へよと。

王様つくづく慨かれて
雲雀を平和の使とし、
地上の人を戒めて

世界は平和となりました。

南の空

雪の山脈連なつて、
遠くに南の空がある、
南の空は美しく、
日にかがやいてなづかしや。

此處は雪ふるさむい國、

空^{そら}さへ暗^{くら}い北^{きた}の國^{くに}、
コバルト色^{いろ}の南^{みなみ}へ、
飛^とんでゆきたや鳥^{とり}のやう。

小さい靴

春^{はる}あたたかな地^{つち}の上^{うへ}、
蒲^{たん}公英^ぼは小^{ちひ}さい日^ひのやうに
可^か愛^はゆく光^{ひか}りうつくしく
そのあたりをば照^てらします。

春^{はる}あたたかな天^{そら}の上^{うへ}、

雲雀は光る花のやう
はてなく匂ひ廣がりて
びちびちびちと啼いてゐる。

わが友達よ、春の日を

光る小さい靴はいて、

遠くはてなくどこまでも

ともに歩いて行きます。

兎

白い兎がびよんびよんと

春が来たとして跳れてゐる、

敷物のやう柔らかな

山の若草踏みながら。

可愛い、紅玉の眼にうつる、

春はるのおほぞら大空はれやかに
花はなさき鳥とり啼なき、歡よろこびの
美うつくしい世よとなりました。

白しろい兔うさぎはびよんびよんと、
てうど殘のこんの雪ゆきのやう
春はるの照てる日ひに溶とけもせて
今日けふもひれもす跳はねてゐる。

高たか高たか

蟻ありは堇すみれの花はなにのぼり
高たかいくと言いひました。
鶯うぐいすは榆にれの樹きにのぼり
高たかいくと言いひました。

栗鼠りすは白樺しらかばの樹きに跳よね

高い 高いと言ひました。
都の屋根のペンペン草
高い 高いと言ひました。

子供は石の上に立ち

高い 高いと言ひました。

太陽は大空に照り

高い 高いと言ひました。

あこがれ

あけぼのの海が鳴る、

誰れ戀しとにあられども

露にうなだれ美しく

釣鐘草がさきました。

あけぼのの海が鳴る、

鷗かもめの胸むねも日ひに赤あかく
こころは遠とほい海鳴うみなりに
眞珠しんじゆのやうに取とられます。

女王

むかしむかしの女王ぢよわうさん、
匂におひ袋ぶくろを肌はだに秘ひめ
春はるの眞畫まひるの諍しづけさを
花はなの蓐しとねに眠ねむります。

むかしむかしの女王ぢよわうさん、

ダイヤモンドの胸飾むなかざり

こがれの夢ゆめを探さがしつゝ、

庭にはに蜜蜂みつばち啼ないてゐる。

蜜蜂と牛

春はるが來きた、春はるが來きた、

木きの洞ほらにすむ蜜蜂みつばちに

外そとに出でなさい出でなさいと、

樂たのしい風かぜが誘さそひます。

春はるが來きた、春はるが來きた、

氷こほりの溶とけた湖みづうみに。
魚うをの泳をよぐを下したに見みて
蜜蜂みつばちは今いま飛とんでゆく。

草くさの青あをんだ野原のはらには
牛うしが歩あるいて居をりました、
流ながるる小川をがははさらさらと
樂たのしい歌うたをうたひます。

蜜蜂みつばちは牛うしに挨あひさつ拶しし、
うれしい春はるよと言いふたれば
牛うしは何時いつもの鈍にぶい眼めで
嬉うれしくないと言いひました。

籠の小鳥

小鳥が籠に啼いてます、
見あぐる空は晴れやかに
庭には花が咲いてる日

空にはふはふは白い雲、
来なさい来なさいこちらへと

籠の小鳥を呼ぶやうに。

小鳥が籠に啼いてます、
「ゆきたいゆきたい」あの空へ
空にはふはふは白い雲

春の畑

びつちこ、びつちこ空そらに啼ないてる雲雀ひばりさん
雲雀ひばりさん何故なぜ啼なくの、
春はるの畑はたけの青あをい麥むぎ、
麥むぎには可愛かあい、巢すが見みえる。

巢すには可愛かあい、子こが生うまれ、

今いまに飛とばうとして居ゐます、
麥むぎの畑はたけに農夫のうふう居ゐて
大おほきい鍬くわが光ひかります。

太鼓と葦

どらん、どらん、どらん、どんどんどん
太鼓誇りて獨顔

こんな大きい音をもつ
私は世界の豪傑と。

どらん、どらん、どらん、どんどんどん、

太鼓の傍には謙遜な
葦の花が咲いてます、
高い匂ひを放ちつゝ。

太鼓と葦をくらぶれば
高慢すると謙遜と
あれ、にこやかに太陽は
二つの心をながめます。

月と星

櫛くしのよに盆ぼんのよに

まん丸まるかつたり細ほそかつたり

お月つきさんには定さだまつた

形かたちのないのは可笑をかしいね。

眞珠しんじゆのよに黄金きんのよに

空そらいつばいに散ちららばつた
お星ほしさんはいつものやう
いつも同じおなに光ひかるのに。

蟻と蟋蟀

冬の來るのも知らないで
夜晝啼いてるきりぎりす、
蟻は毎日働いて
冬の用意に忙しい。

廣い野原に霜置けば

食ふものもないきりぎりす、
蟻は集めた穀物を
甘さうに日に乾してます。

冬の來るのも知らないで
夜晝啼いてたきりぎりす、
どうして冬を暮しませう
蟻は楽しい冬ごもり。

美しい角

鏡かがみのやうな湖みづうみに
姿すがたうつして鹿しかは言いふ、
ほんに綺麗きれいな角つのだこと
脚あしは醜みにくく口くち惜やしいと。

後うしろに犬いぬの吼ほえる聲こゑ

すは獵人かりうどと驚おどろいて、
鹿しかは醜みにくい脚あしをもて
森もりの木この間まを驅かけました。

枝えだと枝えだとが組くみあはし、
そこを驅かくればあやにくも
綺麗きれいな角つのが邪じや魔まになり、
あはれ獲物えものになりました。

魔法使と小娘

魔法使が小娘を

醜いものにしやうとて、

浴みにくるを待ちもうけ

髪に頭にまた胸に

害をするやう言ひ付けて、

三つの蛙をやりました。

薔薇の花より美しい

心をもつた小娘に、

どうして害がされませう

三つの蛙はくれなゐの

三つの罌粟の花となり

湯槽の上に浮きました。

カナリヤと蜘蛛

カナリヤが啼ないてゐる、
きれいな籠かごに春はるの日は
櫻さくらの花はながひらひらと、
カナリヤが啼ないてゐる。

蜘蛛くもは黙だまつて樹きの蔭かげに

小ちひさい網あみを張はつてゐる
櫻さくらの花はながひらひらと
蜘蛛くもは黙だまつて餌えを待まてば。

カナリヤに餌えをやるは
可愛かあい、太郎たろうとお千代ちよさん、
蜘蛛くもは黙だまつてさびしくも
蟲むしの來くるのを待まつてゐる。

上野の鶯

わたしは上野の鶯よ、
春の上野の花ざかり
わたしの啼く日も過ぎました、
遠いみやまに歸りませう。

花の上野の動物園、

博物館の面白さ、
摺鉢山の春のいろ
不忍池の春のいろ。

花の樹蔭に花浴びて、
その銅像は名も高き
西郷隆盛犬つれて
遠く見下ろす東京市。

わたしは上野の鶯よ、
春の上野の花ざかり
わたしの啼く日も過ぎました
遠い深山に歸りませう。

蝙蝠

あさくさのこほもりさん、
この夕がたを出て来ては
知らぬ顔して袖ふつて
観音堂にとんでゐる、
観音堂に灯がついて
祈りの太鼓が、どんどん。

蝙蝠さん 蝙蝠さん

活動寫眞の賑はひも

知らぬふりして噴水が

明るい灯かげに碎けてる、

夏の夜にとぶこほもりさん、

暗に高いは十二階。

シヤボン玉

椀に溶かしたシヤボン水

菅にて吹くとぶくぶくと

小さい大きい玉となり

圓い五しきの玉のうへ

太郎の顔も映ります。

空そらに向むかつてふと吹ふけば
小鳥こどりか蝶てふかまん圓まるく
あれふはふはと飛とんでゆく
圓まるい五しきの玉たまのうへ
てんとうさまも映うつります。

どこへゆくのかシヤボン玉たま
次つぎから次つぎと管くだふけば

あれあれ生うまれるシヤボン玉たま
管くだを離はなれてうれしげに
笑わらつて空そらに消きえてゆく。

小さい町の鐘

お寺てらの鐘かねがゴーンと鳴り
鴉からすが啼ないて夜よが明あけた、
お寺てらの鐘かねがゴーンと鳴り
遠とほくの山やまに日ひが暮くれる。

春はるは櫻さくらの花はなざかり

夏なつは木こ蔭かげに蟬せみが啼なき、
秋あきは熟じゆくした柿かき赤あかく
冬ふゆは路みちゆく橋そりの鈴すず。

東みやこ京こに居ある太た郎らうさん
私わたしの町まちにお出いでなさい、
町まちには午ド砲ンがないけれど
お寺てらの鐘かねがひびきます。

燈臺守

燈臺守のお爺さん

春の海邊に見渡せば、

空には高き草雲雀

岸に静けき波の音。

渺々として春の海

海を友とし懐かしみ

あるは父とし恐れつゝ

五十餘年は夢の間ぞ。

霞める波に白き帆の

漕ぎゆく影に若き日を

そゝるに思ひ浮ぶれば

夢の譜を織る春の波。

あゝ白日はくじつの荒磯あらいそに
象牙きやうげの塔たふをさながらの
高たかき燈臺とうだい春はるの日ひを
うけて輝かく美うつくしさ。

劔
と
血

天空の獨逸魂

東天、紅の血に染みて、
戦の野に結ぶ霜
劍の上に照り添へば、
輾轉として幾百の
砲車うごきて大いなる
流れのごとき進軍よ！

血潮ちしほに渴かはく登音あしおとに
何なんとも知しれぬ硝煙せうえんの
匂におひは深ふかく纏まつはりて
唯ただ、戦たたかひへ！ 戦たたかひへ！
敵てきの國土こくどを蹂躪にじるべく
彼等かれらは進すすむ狂くるほしく。

見みよ一團いちだんの魔まの力ちから、
濁にごり、燦きらめき全軍せんぐんの
進すすむ上うへにぞ、諸共もろともに
怪あやしき巨體きよたい、空そらを搏つかち
ツエツペリンは轟とどろけり、
あゝ天てん空くうの獨逸魂どいつだま！

全軍せんぐん、歡呼くわんこの聲こゑをあげ

「幸あれ友」と劍を振る、
征服、破壊ありとある
誇を見させて空を飛ぶ
ツエツペリンの魂は
やがて獨逸の魂。

空よく晴れて戦場の
千草は枯れて冬の風

鬮體の聲を交ふるに、
ツエツペリンは空高く、
日に輝きて嬉しげに
鼓動も高く北に消ゆ。

あゝ天空の獨逸魂
武器、爆弾と數十の
勇士を乗せて征服の

威力果てなき飛行船。
目にも止まらぬ速さもて
疾風のごと空を過ぐ。

アントワープに幾萬の
市民の膽を奪ひつゝ、
歡樂に酔ふ巴里の夜の
不夜の輝き闇となし

幾多の人と建物を
血に砕きつゝ過ぐる者。

あゝ天空の獨逸魂、
巨體を空に呻らせて
悲惨の犠牲を物とせず
海山越えて幾千里
風と雨とに戦ひて

只^{たゞ}征^{せい}服^{ふく}の夢^{ゆめ}を趁^おふ！

血染の風車

春^{はる}の^ひ日^{たか}高^{そら}く空^てに照^てり
血^ち潮^{しほ}に染^そみし野^のの果^{はて}に
破^{やぶ}れし風^{ふう}車^{しゃ}くるくると
めぐるも悲^{かな}し白^{ベル}耳^{ジュー}義^ム

名^{めい}譽^よの^{れき}歴^し史^{いた}載^げける

白耳義國ベルジウム今ははた
敵てきの跡ひづめにかゝりつゝ
草木くさきも泣なかむ春はるの風かせ

國くにを逐おはれて西東にしひがし
親おやを失うしなひ子こに別わかれ
海路かいろに添そうてはるくくと
落おちゆく身みこそ悲かなしけれ

風車ふうしゃの下もとに花はなさきて
故國ここくの春はるを彩いろどれど
來きたりて摘つまん人ひとも無なく
小鳥こどりの聲こゑも寂さびしくて。

あゝ勇敢ゆうかんに戦たたかへる
兵士つはものどもの妻つまや子こは

家を失ひ飢に泣き
英國和蘭指してゆく。

涙に曇る眼をあげて
故國のかたを眺むれば
春の日遠く傾きて
風車の影も見えわかず。

カイゼルの夢

血潮のいろに赤き日の
曠野の果に沈む時
いづこと知らぬ関のこゑ
雲に吸はれてうら寂し。

戦の野に月を経て

日に黒みたるカイゼルの
瘦せ衰へし顔よりぞ
夕闇せまり怪鳥啼く。

星またいきて天幕に
れむる將士の夢さむく
あゝ寝れ難きカイゼルの
胸の惱みの深うして。

げに自らは驕ぶりて
悪魔の翼に鞭をあげ
人と神とに悪まるゝ
悔ゆるに遅き罪の數。

今カイゼルは億萬の
劍に刺され呻めきつゝ

高き崖より千仞の
真暗き谷に轉げ落つ。

あなやとばかり目覺むれば
星斗は冴えて曉の
風冷えくと頬を撫で
戎衣におもき夜の露

人の血潮を流すべく
先づ東天は紅に染み
ツエツペリンの響にぞ
夏の短か夜明け放る。

潜航艇の狂暴

暗き浪間を蹴りてゆく
黒く輝く巨體は何ぞ、
鰐か鯨かさて怪し
怪しきは潜航艇

全身鋼に身を堅め、

怒濤も岩をも物とせず、
思ふがまゝに振舞へる
あな恐しの潜航艇

煌々と照る一つの燈
さながら悪魔の眼の如し、
荒浪噛みて勇ましく
身ぶるひしゆく其の姿

折も折なり闇の海
漕ぎくる巨船を目蒐けつゝ
わが狂暴の獨逸魂
示すは今ぞと息を呑む。

かくとも知らぬ巨船には
あまたの人々安く眠り

機關士は石炭をつぎ
着くべき明日を樂しむ。

空には霜夜の星冴え、
波は暗く相打つとき、
刻々に逼る悲劇を
知らずして巨船は走る。

空中くうちうにツエツペリン、
海上かいじやうに潜航艇せんかうてい、

「わが獨逸どいつの威力ありよくを見よ」と
乗込員のりこみあんは勇む。

悪魔あくまのごとく現あらはれ、

すはと驚おどろく間まもあらず

巨船きよせんを碎くだく其その一撃げき

狂暴きやうぼうの其その振舞ふるまひ。

波なみの上うへに泣なき叫さけぶ

溺おぼれんとする罪つみなき人ひとを

物凄ものすごき微笑ひせうにかけ

悠々いいうくと漕こぎ去きる潜航艇せんかうてい。

殫れし戦友

光も暗く野に山に

こむる砲煙もの凄く

煙のなかにはためくは

あゝ勇ましき日章旗

み國の爲ぞいざ進め

人におくれず諸共に

要塞めがけましぐらに

あゝ勇ましき日章旗

勝利の喇叭ひびくとき

萬歳の音響くとき

勇士はあはれ叢に

血潮に染みて居たりしが

天地に響くわが軍の
勝鬨きいて幽かにも
頭をもたげうれしげに
萬歳となへ息絶えぬ

あゝ風さむし日も暮れぬ
そこを通れる戦友は

冷たくなりし骸にぞ
熱き涙をそゝぎけり。

凱旋の將軍

凱旋門は空高く
百萬の民は歡呼しぬ
戦捷ちて將軍は
今ぞ都に入らんとす。

雲晴れ旭日出づること

戦の雲收まりぬ
戦捷ちて將軍は
今ぞ都に入らんとす。

榮ある日をば祝はんと
勇士の功讚へんと
ゆきくる人は胸間に
花を飾りて歡呼しぬ。

世界の果ての果てまでも
日本の武威を示したる
勇士の中の勇士をば
目のあたり見るうれしさよ。

春の光のひかり
平和の聲は轟けり

世に比ぶべきものもなき
あゝ將軍の凱旋よ。

肉弾の歌

砲彈はうだんと勿忘草わすれなぐさ

張家屯ちやうか張家屯とんちやうか

陣中ぢんちゆうのつれづれに

破やぶれし天幕てんとをぬけ出いで、

兵士へいしらは花はなを摘つむ。

瑠璃色るりいろの瑠璃色るりいろの

勿忘草わすれなぐさを砲彈はうだんの

殼からに挿さし、はるゝと

故郷ふるさとの人々ひとびとおもふ。

暑い行軍あついかうぐん

空そらに眞赤まっかな太陽たいやうが

遼東れうとうの地ちを焼やいてゐる、

汗あせにまれて我軍わがぐんが
すゝむ遠とほくに海うみが見みゆ。

涼すずしい海うみには敵てきの艦ふね

「すは日本にほん軍見ぐんみえたり」と、

砲彈はうだん空そらに呻うならせて

ドンドンドンと打出うちだした。

光彈くわうだん

暗やみにまぎれて敵陣てきちんに

肅々しゆくしゆくとして近ちかづけば

敵てきの陣ちんから光彈くわうだんが

空そらにくだけて地ちを照てらす。

次ついで射いかける機關銃きかんじゅう……

されど我軍わがぐん光彈くわうだんを

花火はなびとながめ微笑ほほえみて
物ものとはせずに進すすみゆく。

日章旗にっしやうき下の二兵士ふたひし

満山まんざんすべて屍しかばねと

味方みかたの軍全滅いくぜんめつし、

櫻井さくらゐ中尉ちゆうゐ血ちに染そみて

息絶いきたえぐに見廻みまはせば、

かなた小高こたかき丘をかの上うへ
日章旗にっしやうきのみひらくと
砲彈はうだん浴あびる其下そのしたに
二人ふたりの兵士へいし死しに居ゐたり。

ラインの悲劇

悪魔の翼の音高く
平和の空に一點の
怪しき影を飛行船
ラインの町に近づけり

春の白晝に夢ごいち、

よき聲あげてカナリヤの
南の窓に歌ふとき、
近づき来る飛行船。

驚きさはぐ人々の
救ひの聲も何事か、
閃めき落ちる爆弾に
雷と碎くる物の音。

銀行、會社幾十の
建物微塵と碎きつゝ、
地にひれ伏して耳を掩ひ
喚めく人々哀れなり。

悠々と去る飛行船、
慘々しくも照らしたる

春の日にカナリヤは
血潮に染みて死に居たり。

巨弾の上に

いつしか春のめぐり来て
弾に打たれて裂けし枝
血潮に染みし荒野にも
うす紫にひく霞

砲車のおとに咲く堇

梢に啼ける小鳥さへ
み國のために討たれたる
勇士の魂か痛ましき。

國を奪ひし獨逸兵
見るくそこに陣を張り
砲車、飛行機、銃に
威力を示す振まひよ。

戦^たの^か間^ひの^まつれ^ゝに、
葉^は卷^{まき}を^く薰^{ゆり}ありあるは^{また}又
トランプ^{きよう}などに^{きよう}興^{じつ}じつ、
聲^{こゑ}高^{たか}々に^{わら}うち笑^ふふ。

春^{はる}の^ひ日^{なが}永^{なが}の^あ暖^{たか}かく
巨^{きよ}砲^{ほう}を^{ほこ}誇^るる^{だい}大^{せう}小^{せう}の

砲^{ほう}丸^{ぐわん}あ^{また}並^{なら}べつ、
脾^ひ肉^{にく}を^{たん}嘆^{つら}ず^{にく}面^{めん}憎^{にく}さ。

身^み丈^{たけ}に^{ちか}近^かき^{きよ}巨^{だん}弾^{だん}には
一^{ひと}人^りの^{をとこ}男^ま跨^{またが}りて、
口^{くち}笛^{ぶえ}吹^ふけば^{はる}春^{はる}の^{とり}鳥^{とり}
答^{こた}へて^{うた}歌^たふ^{むしん}無^む心^{しん}さよ。

並ぶ巨弾は殘虐の
墓場に増して痛ましや、
あゝ劍と血の閃めきに
明るく嘆く春の風。

世界地圖

劍を按じて起てる子よ
雲は遙かに海遠く
雄心抑へがたきかな
驚の瞳の鋭くて。

青、黄や赤に塗られたる

世界地圖こそ不思議なれ、
星辰空に瞬きて
歴史は遠し世界地圖。

英雄、妖女、興亡の
鐵火に咽ぶ繪卷物、
時の力のすさまじく
誰か最後の勝利者ぞ。

あゝ人生の一角に
天をも焦がす獅子吼して
「不能」の文字を嘲みたる
英雄もはたいかにせし。

春の淡雪野に溶けて
流描くに似たるかな、

青、黄、赤に國境の
絶えず變りて定らず。

アルペンの雪日に光り
黒龍の水影遠し、
そも幾人の英雄に
彩られしぞ世界地圖。

劍を按じて起てる子よ
只熱血の止みがたく
曠古の壯圖果たすべく
北斗の星に劍を揮る。

珠
玉
集

郵便脚夫

雪ゆきの山やま越こえはるぐと
黒くろい靴かばんを肩かたにかけ
郵便脚夫いゆうびんきやくふ急いそぎ足あし…
黒くろい靴かばんに何なにがある。

郵便脚夫いゆうびんきやくふいそぐと

ひとり微笑み笠をあげ
麓を見れば家々に
赤い国旗が翻る。

黒い鞆に一杯の

うれしい葉書あるは又

龍の表紙の新少年

黒い鞆のよるこびや。

空はコバルト日は高し

郵便脚夫、急き足、

この上もなき「お目出度う」

家々毎に配りゆく。

雪達磨

左は海に右は富士
その真中に雪達磨、
炭の眼玉を光らせて
さて「新年はお目出度う」

三保の松原雪白し

沖には帆船六つ七つ、
朝日に溶くる雪達磨
さて「新年はお目出度う」

兎狩

雪ゆきに埋うもれた路みち一里り

逢あふ人ひと稀まれな村むらつゞき

林はやしをへだて聞きこえくる

兎追うさぎおふ聲こゑ珍めづらしや。

「やーほいほい、やーほいほい」

雪ゆきの野の山やまに勇いさましく

躍なをどりつ驅かけつ兎追うさぎおふ

村むらの男をとこの子こらおもしろや。

雪ゆきに埋うもれた路みち一里り

母はにつれられ二人ふたりづれ、

母はの里さとへと訪たづねゆく

雪ゆきの或ある日ひのなつかしや。

竹馬

誰だれの竹馬たけうまいちばん高たかい？

高たかいく竹馬たけうまに

乗のりては走はしり屋根やねの雪ゆき

口くちつけて喰くふ得意とくい顔がほ。

武たけしの竹馬たけうまいちばん高たかい

高たかいく竹馬たけうまに

乗のるはよけれど學問がくもんは

誰だれにも劣おとる可笑をかしさよ。

雀

雀寒すずめさむかる、飢ひもじかる
ひと夜よに積つもる雪ゆきの世よの
梢こずゑにとまりチチと啼なき
身みじろぎすれば雪ゆきが散ちる。

散ちるは眞珠しんじゆか白銀しろがねか

あまりに眺望ながめうつくしく
嬉うれしくあらぬ雪ゆきの世よに
雀寒すずめさむむかる、飢ひもじかる。

空氣銃

南みなみの國くにの空そら晴はれて
日は美うらしく小鳥こどり啼なく、
春はるの梢こずえに空氣銃くうきじゅう、
つと射いかれば小鳥こどりとぶ。

小鳥こどりを獲とるも獲とらぬとも

何なんのかいはあるべきや、

黒くろき小ちひさき光ひかる玉たま

いづこにとびし？ 日ひは長閑のどか。

東北大飛行の歌

空そらに輝かがやく雲くも遠とほく、

鳥とりにはあらぬ奇くしき影かげ

近ちかづくまゝに飛行機ひかうきの

四よつの形かたちぞ鮮あざやけき。

勇士ゆうしの胸むねと諸共もろともに。

雄を々々しく響ひびくプロペラの、
行衛ゆくゑもうれし陸奥むちのくの、
空そらを彩いろどる秋あきの花はな

ペルリ記念碑

波間に添うて走りゆく
小さき馬車の喇叭の音
冬の明るき日を揺りて
玩具のごとく驅かけるかな。

白き鷗のそれのごと

観音岬を噛む波の
かなた紫紺の空遠く
富士の聳えてうれしかり。

海ちかき日の暖かさ、
棕櫚や蘇鐵の丈のびて
網をつくらふ老漁夫の
さびしき漁村過ぎゆけば。

一灣の水靜かなる
浦賀の町は晝閑に、
古き夢よりさめしごと
工廠の笛鳴り出でぬ。

馬車は山路を走りゆく、
小なき馬車の喇叭の音
峠を越せばやゝ低く

久里濱ひらけ見渡さる。

馬車を乗りすて路を問ひ
沙路を踏みて唯一人
ゆけばさびしく大理石の
昔を語る面持や。

米國水師提督波理との

文字鮮やか
かの記念碑や
その傍に令孫の
手植の松の色も濃し。

や、暮れそめて久里濱に
よせてはかへす波の色
琥珀と黄金に美しく
過ぎし昔を偲ぶかな。

夏の夜の笛

町のはづれの南の丘に
三人のぼりてその一人
明笛をよく吹きにけり
かの夜の月はまんまるく。

夏の祭の囃の音、

遠くきこえてちらちらと
盆火も見ゆる丘の上
明笛の音の澄みゆきぬ。

かの夏の夜の笛上手、
そは誰なりし又一人
そは誰なりし朧ろにて
少年の日はるかなり。

故郷小曲

○

虞美人草の今に散りそに動いてる
夏の晝、

ピヨピヨと雛鳥が鳴いてゐる
きれいな羽に日があたる、
今に散りそに動いてるひなげしに

とまつて嘆く白い蝶

○

都がへりの哀しさは
緑の丘にたゞひとり
草の莖かむもの思ひ、
遠く光るは湖
百舌鳥が啼く
麥刈蟬が鳴く、

季節はづれの鶯も平気で啼いてゐる
戀しい戀しいあの友よ。

○

赤い月

時々そつと雲をもれる赤い月――
美しいローマンスもない町を
荷車がごとごとと夜更にゆく……
あらポンポンと何處かの時計が鳴る。

○
どんとあがる花火

月の夜

うつくしい幻の枝垂柳もきえうせて
くるくると火の色が落ちてくる
赤い殻のみ落ちてくる。

新少年の歌

み空に高き太陽の
光に優してわが路を
希望の路を照しゆく
新少年の勇ましき
國の果より果までも
普れく照らす其の光

プロペラの音、空を切る
新しき世に新しき
新少年を友として
いざや進まん諸共に
世界に誇る日の本の
新少年の名を揚げよ。

花鳥吟

1、椿

南の丘に椿ちる
赤い椿がほたほたと
人知れず散るなつかしさ。

麦やいのびて陽炎の

かなたに霞む伊豆沼や
小鳥の聲も春めきて。

南の丘に椿ちる、
先祖代々墓どころ
日は琥珀色、墓黙す。

2、鶯

山にのぼれば丁々と
春の木を伐る音さびし
鶯なきて日は長閑。

山にのぼればきりはたり、
機織る音のきこえきぬ
いづこに家のあるならむ。

菜の花見えて家見えて
此處仙境をさながらの
山の奥にぞきりばかり。

3、蒲公英

幼きわれら打揃ひ
都にのぼる先生と
別を惜む春の路

蒲公英さきて雲雀啼く。

若き先生はるくと
春の一路に歩みゆく
後姿を今もなほ
目のあたり見る心地すれ。

啄木鳥

林はやしのなかのたか高い木きに
今日けふも今日けふとて啄木鳥きつ、きは
コトコトコトと音おとたてる
空そらに雲くもゆき日は麗うら。

花はなも櫻さくらも他所よそにして

孤ひとり樂たのしむ深山みやま棲すま、
遠とほい親おやより木きの幹みきに
鋭すどい嘴はしで探さがすのは
黄金きんか眞珠しんじゆか白銀しろがねか
さても不思議ふしぎな魔術者まじゆつもの。

石斧

葦、葦、野のすみれ
松原ちかき畑中に
春の日かげに汗ばみて
石斧拾ふと二少年。

空にうらく
揚雲雀

昔ながらの春のいろ、
このわたりにはその昔
土族の群の棲みしゆゑ
石斧、石刃、矢の根石
時々人の眼に觸れぬ。

葦、葦、野のすみれ
今日の獲物は珍らしき

形かたち完まつたき石せき斧ふなり。

野の火びの煙けむりもなつかしき、

春はるの木こ蔭かげに憩いこひつゝ、

飽あかず語かたらふ二せうねん少年ねん。

雪の馬上に

大おほきいマントを身みに纏まとひ

雪ゆきの馬ば上じやうに跨またれば

僕しもべは曳ひきて門もんを出いづ、

二尺しやくに餘あまる堅かたき雪ゆき、

霏ひ々としてまた雪ゆきが降ふる。

くるまとは
車通らず人行かず、
見渡す野山一色に
雪を飾りて音もなく
空に綾織る雪の舞、
病を得たる身になし。

ていしゃば
停車場までは路三里
その半ばにて雪霽れぬ

まば
眩ゆき聖き莊かの
雪の世界をざくざくと
歩む馬こそわが身こそ
現世ならぬ尊さよ。

星の曉

清く澄んだ古驛の
神の境のやうな夜には
空に一杯黄金の星が散らばる。

地にせまる星の群は
美しい果實のやうに

蒼い天鵞絨の空を飾る。

や、白く光つて曉の風の吹くころ、
私は星の中から生れた。

山彦

丘をかの上うへから「や」と叫さけぶと、
向むかふの丘をかでも「や」と應こたへる。

山彦やまびこよ、山彦やまびこよ、おまへは

いつも緑みどりの木こかげに

寂さびしく無む邪じ氣きに暮くらす小供こどもか。

私わたしが丘をかの上うへで叫さけぶと
遠慮えんりよぶかく應こたへては
ひとり山やまふところに消きえる。

向日葵

「いろはにほへと」と讀むこゑの
あどけなく揃つてきこえる
小學校の白壁に
眩しく揺れる向日葵の花

海邊スケッチ

入江の釣人

釣人はしづかに釣る、
入江に映る夕榮の
馨のごとく消えても、
釣人は歸らうとしない。

海^{うみ}ち^かい^{むらさき}紫^の松^{まつ}原^{ばら}に
蟋^{こほろぎ}蟀^が啼^なき^や止^やみ、
入^{いり}江^えに^{ほし}星^が映^{うつ}つても、
釣^{つり}人^{びと}は^{かへ}歸^らう^とし^ない。

漁^{ぎよ}家^かの^{かぼちや}南^の瓜^の花^{はな}か^ら
蜜^{みつ}蜂^{ばち}が^さす^でに^さ去^り
沙^{すな}に^ほ乾^{した}た^{あみ}網^{には}は^{つゆ}露^が下^おり^る

釣^{つり}人^{びと}は^{しづ}か^に釣^つる。

波間の金華山

崖^{がけ}の^{した}下^の柔^{やは}らかな^{すな}砂^ぢ地^に
村^{むら}の^{わかものども}若^が者^共が^{すま}角^ふ力^をす^る、
盆^{ぼん}の^{やす}休^{みの}う^れれ^しさ。

素^す裸^{だか}の^{わかもの}若^が者^共が^{にん}二十^人ほ^ど

騒ぎ合つて二人づゝ取組む、

晝の海上を北方に漕ぐ一つの舟
擡が銀のやうにきらりきらり光る。

海の上に遠く翠色に

夢のやうに柔らかない線を畫くのは

遠い／＼金華山だ、

今、肥つた男が投出された。

逗子の夕

波は金色きらきらと

夕べ静けき一灣の

波に漕ぐ舟金の舟。

舟人さへも金色に

染みてゆくへの眩しさよ、

櫻貝手にわれは見る。

千鳥

あけがたの海は
新鮮な香氣に充ちて
限りないよるこびに廣がる。

千鳥の群は汀に足を濡らし

また寄せくる波に飛立つ、
千鳥よおまへは
輝く光の碎片か
それとも青い波の碎片か、
あけがたの海の光に歌ひ
波と戯れては啼く。

男
兒
頌

日本國民の歌

見^みよ 東^{とう}海^{かい}の 曙^{あけぼの}に
神^{かみ}の 雫^{しづく}の 凝^こり 成^なせる
雄^を々^々 しく 清^{きよ}き 大^{おほ}八^や洲^{しま}
日^ひに 輝^{かが}き て 匂^{にお}ふ かな。

歴^{れき}史^しは 遠^{とほ}し 二^に千^{せん}年^{ねん}

波なみ永とこしへに岸きしを打うち

靈れい峯ほう空くらに聳そびえつゝ

翼はねあるごとく時ときは逝ゆく。

義ぎ勇ゆう剛かう健けん任にん俠けふの

あらゆる徳とくを惠めぐまれし

わが民族みんぞくの起たちてより

四よ方ろの醜しこ草がま伏ふし靡なびく。

げに天あめ地つちに類たぐひなき

光ひかり明りを慕したふ民族みんぞくの

進しん取しゆの血ち潮しほ和田わだ津つ海みの

八や百を潮しほのごと鳴なり止やまず。

いざいざ進すすめ、はた歌うたへ

世せ界かいのうちに吾われ等らのみ

與あへられたる力ちからある
使命しめいを果はたす時ときは今いま

有史いうし以來いらいの戦たかひに
歐亞おうあの野邊のべに悲響ひきやうあり
見みえざる力ちから人類じんるいに
警いましめ告つぐるものや何なに？

あゝ文明ぶんめいの恩惠おんけいは
國際法こくさいはふを蹂躪じゅうりんし
無辜むこを屠ほふりて暴力ぼうりよくに
弱者じやくしやの國くにを奪とることか。

誤あやまられたる礎いしづえに
國くにを建たてんと願ねがふこそ
沙上さじやうに家いへを建たてんより

なほ危あやふかる心こゝろ地ちすれ。

金風きんぷう遠とほく雲くもを吹ふき

進取しんしゆの意氣いきは高鳴たかなれり、

義勇ぎゆうの子こらよ諸共もろともに

高たかき理想りさうにいざ起たてよ。

炎ほのほのごとく眼めは燃もえて

成なすべき力ちから全身ぜんしんに

潮うしほのごとく漲みなぎれる

わが民族みんぞくに幸さちあれや。

われらは若わかし路遠みちとほし、

義勇ぎゆう正義せいぎを血ちに書かきて

行手ゆくてにすゝむ旗はたじるし

わが民族みんぞくに幸さちあれや。

あゝ人類の中心は
わが民族の中うちにあり
義勇ぎゆうに富とめる先驅者せんくしやは
わが民族みんぞくをおきてなし。

世よの酵母わもととなり鹽しほとなり
汲くめど盡つきせぬ清新せいしんの

英氣えいきの泉いづみ誰たれか知る
いざいざ進すすめ若わかき子こよ。

於おの能の碁こ呂ろ島じまの太古たいこより
日月じつげつのごと變かはらざる
わが民族みんぞくの義勇ぎゆうの血ち
世界せかいに示しめす時ときは今いま。

太平洋の捕鯨

久遠のひゞき空を打つ

太平洋の朝まだき

北斗の星の燦めきに

装なりぬ捕鯨船。

「北西方！」

進行！」

あゝ戦を告ぐるごと
汽笛の鳴れば、船長も
斯く聲高に呼ばはりつ。

怒濤を水沫く推進機の
響に連れて海の猛者
ゆくは何處ぞ三千里
黒潮の香の匂ふ沖

木の葉のごとく揺れ揺るゝ
あゝ勇ましき捕鯨船
帆網を鳴らす疾風の
凜々として心地よし。

朝日のぼれば荒海の
波のうねりも物凄く

轟々として藍黒の
山と谷との相打つよ。

「見よ鯨出づ！ 鯨出づ！」
沖の彼方を眺むれば
黒き巨塊の浮き沈み
二條三條霧を吐く。

湧き立ちかへす荒海の
潮の香に浮き出でし
天の恵みの海の幸
日に輝きて近づくに。

活氣に満てる捕鯨船
全速力を出しつゝ
鯨の方に近づき

時を見はかる其刹那。

太平洋をどよもして
捕鯨砲こそ鳴り渡れ
電のごとく飛ぶ銛は
見事鯨を射刺したり。

鯨は呻き八千尋の

底そこに巨體きよたいをのたうてど
炎ほのほのごとき銛もりに今いま
打うたれては早はや力ちからなし。

誰たれか知るべき荒海あらしうみの

男をの子この持もてる幸福かうふくを

「鯨取くじらとりぬ」とかへりゆく

太平洋たいへいやうの捕鯨船ほげいせん。

七濱ななはま八濱はま賑にぎはひて
夜更よふけも知らず瓦斯がすの火ひの
花はなのごとくも咲さき匂におふ
夏なつの濱邊はまべの勇いさましさ。

『雄飛號』の上から

わが日の本の空界に

勇敢にして新しき

喜び今や齎されぬ

その名も『雄飛』飛行船。

數あまたある飛行機や

はた飛行船ある中に
將軍の如嚴めしく
其の名輝く雄飛號。

高く飛べ飛べ雄飛號

空廣くして際もなく

命惜まぬ勇士らの

わが日の本に多かるを。

空暗くして雨煙る
満都の花を下にして
雄飛はじめて勇ましく
帝都の春を訪れぬ。

「雄飛きたる」と人々は
路ゆく人は足を止め

働く人は窓に出て
雄飛のゆくへ飽かず見る。

あゝ怪物の鼓動かと
空にとゞろく機關の音、
危ふき空に微笑みて
東にすゝむ雄飛號。

遙か帝都を見下るせば

そことはなしに響きくる

歡呼の聲は空耳か

はた自らの血の鳴りか。

九段の上にとびくれば

ほのかに霞む森蔭に

そも幾萬の英靈の

御國を守り眠るか。

靖國神社に向ひつゝ

静かに空を一周し

熱き心に拜るがみて

また堂々とすゝみゆく。

漫々として流れたる

春雨はるさめけぶる隅田川すみだがは
新橋しんばし日比谷ひびや下したに見みて
所澤ところざはにぞ向むかひける

百數名すうめいの兵士へいしらは
み空そらを仰あふぎ一様やうに
「雄飛ゆうひ歸かへる」と紅白こうはくの
旗打はたうちふりて合圖あひづしぬ。

此時このとき雨あめは既すでに晴はれ
秩父ちちぶの山々やま々美うつくしく
雲雀ひばりの聲こゑもそちこちに
「雄飛ゆうひ歸かへる」とよるこびて。

高原の駿馬

秋の山路を高らかに
歌うたひつゝ越えければ、
繚亂として目も綾に
秋の八千草匂ふかな。

大氣は澄みて空青う。

輝く雲のうれしさや、
あゝ高原の秋は今、
神の境をさながらに。

露に草鞋を濡らしつゝ
男子の血潮高鳴るに、
いづこと知らず朗らかに
馬の嘶ききこえ来る。

見よや駿馬はそちこちに、
あるは緑の草を喰み、
あるは遙かに空仰ぎ、
あるは走れり數いくつ。

あゝ高原の寵兒、汝、
世にたぐひなき健やかさ、

毛並は光り、眼はうるみ、
蹄は雲を踏むごとく。

風を友とし、日を浴びて
夕べとなれば明星の
きよき光に紫の
影を曳きつゝ歸るかな。

自由の子らよ、はるくと
都にのぼる日やいかに、
世にも稀なる駿馬ぞと
御料の馬となるならん。

獸乍らに帝王の

側にかしづくめでたさよ

あゝ野に山に紫の

瑞雲匂ふ大御代に。

高原の秋闌はに

温泉に通ふ人の影

唄の音ともに消えゆけば

蟲の音そゝる啼きしきる。

馬は嘶く聲高く

獅子にも優り健やかに
蹄も軽く草を踏み
秋の天地の寵兒、汝。

夜討の五月雨

杜鵑血に啼く五月雨の
富士の裾野の夜は更けて
篝の火さへ暗きとき、
曾我がの十郎祐成と
弟五郎時致は
父の仇の祐経を

討ちて恨を晴らしたり。

蝶と千鳥の直垂に、

血刀さげて兄弟が

「仇討ちぬ」と呼ばはれば

二千の假屋どよめきて

「すは夜討ぞ」と太刀とりて

武士數多行き交ふ。

仁田の四郎忠常は

大音聲を張りあげて、

「御狩場荒らす無禮者

刀の錆となしくれん」

かく驅け寄れば十郎は

「なにを小癩と」答して

火花を散らし切結ぶ。

涙^{なみだ}を誘^{まそ}ふ五月雨^{さみだれ}や
兄^{あに}の十郎^{ちゅうじ}討死^{うちじ}して
弟^せ五郎^{ごらう}は召捕^{めしと}られ
刑場^{けいぢやう}の露^{つゆ}となりしかど
あゝ東海^{とうかい}に名^なも高^{たか}き
富士^{ふじ}の裾野^{すその}に名^なを留^{とど}む。

大江の岸

深山^{みやま}の奥^{おく}の花^{はな}の露^{つゆ}
馬^{うま}に水飼^{みづか}ふ細流^{さいながれ}
清^{きよ}き濁^{にご}れる集^{あつ}めつゝ
百里^{ひゃり}を走^{はし}る大江^{たいかう}よ。
沼^{たう}々^くとして海^{うみ}に入る

北上川きたかみがはの岸きしに立たち
聞きけばうれしき水みづの音おと
男をとこの兒こを頌ほむる響ひびきして

山やまを湧わき出いで野のをめぐり
部ぶ落らくを過すぎて流ながれ來きし、
杳はるけき旅たびの思おもひ出でを
北きた上かみ川がはよ語かたれかし。

桃もも咲さく村むらの少せう年ねんは
長ながき堤つみをかへりゆき、
柳やなぎのかげに村むら乙をとめ女
手て拭ぬぐかむりに休やすらひぬ。

機はた織おる家いえの白しろ壁かべや
鸚いん哥こよく啼なく窓まどのかげ、

美^{うつく}しき繪^ゑに溶^ときなして
夢^{ゆめ}み流^{なが}るゝ大江^{たいかう}よ。

この現^{うつ}し世^よの物語^{ものがたり}
海^{うみ}にそゝぎて幾^{いくとせ}年^{ねん}ぞ、
汪^{わう}洋^{やう}として日^ひも夜^{よる}も
昔^{むかし}のままの水^{みづ}の音^{おと}。

鷺^{さぎ}と飛行機

萬^{ばん}古^この雪^{ゆき}に日^ひの照^てれば
白^{しろ}銀^{がね}のごと輝^{かがや}きつ、
鷺^{わし}は炎^{ほのほ}の眼^めをあけて
遙^{はる}か雲^{くも}間^まを見^み下^{くだ}ろしぬ。

怪^{あや}しき響^{ひびき}、空^{そら}を切^きり

近づき来るものの影
驚は怒に身ふるひて
鋭き聲に待てといふ。

「神の境に雷と」

月と日と風友とせる
わが樂園に来る者、
神の怒を知らざるか。」

眼にも眩ゆく羽搏ちして
怪しき影は逼りきぬ、
驚の叫びに微笑みて
いざいざ来れわが友よ。

「神の息吹に閉されし
アルプス山も一飛びに

自由じゆうに空そらを翔かけりゆく
科くわ學がくの力ちから知らざるか。」

櫻の別れ

櫻さくらが咲さいた、何なんとまあ
綺き麗れいな美み事ごとな花はなでせう
日に本ほんの國こく花くわは櫻さくら花はな
日に本ほんの武ぶ士しは櫻さくら花はな

風かぜもないのに花はなが散ちる

春はるの錦にしきのひら／＼と
空そらにみだるゝ花吹雪はなふぶき

隅田すみだの川かはに花はなが散ちる

端艇ポート、小蒸気こじょうき、花見舟はなみぶね

春はるの夢ゆめ趁おふ都鳥みやどり

さて賑にぎやかな川かはの面おも

花はなは流ながれる、流ながれては

どこへゆくとの當あてもなく

ホーンと鳴なるのは淺草寺せんそうじ

嵐の航海

港の丘の赤い警燈に

『さようなら』を告げて

小さい黒い蒸気が

航海に向つた

遠雷のつうな海鳴

一つの舷燈に照らされて

物凄く光る波

その他は眞黒い海

小さい蒸汽の客は

僅か二十人に足りない

みんな黙り込んで

船員が時折窓から覗く。

これはきつと幽霊船だ
この広い海の真中を
どこに連れて行かれるのだらう
少年はさう思つた。

直ぐ嵐が來るといふのに
機關士は落付拂つて

眞黒い恐ろしい海を相手に
神のやうに漕いでゆく。

噫乃木將軍

過ぎし日露の戦役に
旅順攻圍の司令官
乃木將軍の英名は
世界の果に響きたり。

壯烈鬼神を泣かしむる

難攻不落の苦戦には
げに幾萬の將卒の
護國の鬼となりしかど、

わけて涙の種なるは
乃木大將の二愛兒の
共に名譽の戦死をば
み國のために遂げしこと。

かの南山の激戦に
歩兵中尉の勝典氏
旅順の役に保典氏
父の馬前に討死しぬ。

「山河の眺め荒涼の
風腥き新戦場」

馬に跨りもの思ふ
金州城外日は斜め。」

戦果て、南山の
ほとりを過ぎし將軍は
夕日に向ひいかばかり
悲壯の思寄せにけむ。

わが皇軍の萬骨に

山の形も改まる

爾靈山頂しこ草に

大和撫子色赤し。

平和となりし其の後は

軍神乃木の聲高き

其の一面に育英に

身をば捧げて居たりけり。

質素、剛健ありとある

美德を示す人格は

五年の間一世に

深き感化を與へたり。

光さやけき天つ日も

悲しく曇る時あるか、

先帝陛下御不例に

山河ひとしくうなだれて、

生ある者もなき者も

ともに祈りし甲斐もなく、

わが大君の神される

世に極みなき悲しみよ。

先帝陛下の御寵愛

一しほ深き忠烈の

乃木將軍はこを聞き

悶々の情堪えがたく、

病と稱して閉ぢ籠り

日夜齋戒沐浴し

桃山御陵の供奉も辭し
深き覺悟を決し居ぬ。

時は大正元年秋九月
十三日の午後八時
大内山を揺るがして
號砲閣に轟けり。

涙に軋る靈柩の
いま宮城の御發引、
時しも空に將星の
怪しく尾ひき消えゆきぬ。

此夜將軍赤坂の
奥の一室の床の間に
先帝、今上兩陛下の

御眞影をば掲げつゝ

供物を捧げ、大將の

正服を着け、軍刀を

片手に遙るか大君の

みあとを慕ひ拜るがみぬ。

かの號砲を末期とし

腹一文字に掻き切りて
返す刀に咽喉を突き
刃に伏せる雄々しさよ。

大將夫人は諸共に

短刀をもて咽喉をつき

其傍に血に染みて

美事の自殺遂げ居たり。

不朽ふきうに芳にほふ烈れつ夫人おじん
遊いうた惰きよえい虚きよえい榮の世よにありて
女をんなながらも將しやう軍ぐんの
譽ほまれを添そへて美うつくしき。

壯さう烈れつ神かみと祭まつらるゝ
乃の木ぎ將しやう軍ぐんの一生しやうは

日本にほんの武ぶ士しの典てん型けいと
世界せかいに誇ほこる光ひかりなり。

歴れき史しを飾かざる英えい雄ゆうの
雲くものごとくも多おほけれど
血ちもて彩いろどる乃の木ぎの名なの
千せん古こに生いきて輝かやかん。

生ひ立の記

山の搖籃

春はるの日のことである。森もりかげの雪ゆきさへ
既すでに溶とけて、野のの小路こみちの土つちはふつくいと美うつくし
い光ひかりを浴あびて、堇すみれや蒲たんぽ公英ぼがそちこちに咲さ
き、空そらには雲ひばり雀がうら／＼と啼なく。町まちから
小半里こはんりもある萩澤はぎさわといふ村むらに放樂はうらくの芝居しば
があるといふので、若わかい叔母おばや母はやその他た

隣近所の二三人に連れられて其の路を歩
るいて居た、確か未だ五つ位ぐらゐのときであつ
たらうと思ふ。短い桑畑くはばたけが兩側りやうがはにあつて、
途中とちゆうはいつもより人通りひとどほが賑やかで所々ところどころ
に物賣る露店ものうろてんが出てゐる。

筵張の芝居小屋の中なかは頗る廣く澤山の
人が居た、小屋は實に高く思はれた、舞臺に
はやがて一人の嚴めしい武士が囚はれて

出て來た、すると其の前に二三の公卿が梅
の花の枝をつき出して居た、今思ふとそれ
は安倍の貞任宗任の芝居である。其の時、
其の武士は恐らくは

わが國の梅の花とは思へども
大宮人はいかにいふらむ

と悠然として三十一文字を詠じたであら
う。それから雪が舞臺を埋むるばかり降

る場面もあつた、それらは只無暗に珍らし
かつた。其の時の往復の路は非常に遠か
つた。その時の自分の様子は今なほ鮮や
かに目にうかぶ。然し若かりし人々は老
い、詩的な幼年の夢のやうな世界は再び歸
つて來ない。

それ以前に三つ位の時だ、近所に火事が
あつて私は人の背におんぶされて居た、空

には盛んな火の粉が星夜の闇に亂れ散つ
た、家の人々の物の具を運ぶのが影畫のや
うに往來する。私は靜かに空を見あげて
居た。然しそれは單純な印象しか止めて
居ない、然るに野芝居のかへりはいかにも
遙かな幼年思慕の美しい情を湧き立たせ
る、私の最初の記憶はこれを以て初まると
いつてもいい。

奥羽街道の一驛としての築館村(其頃は村)は戸數五百戸ほどのさびれた部落であつた。南に丘があつて半ば丘の上に作られた村である。南の方の小高い丘にはこんもりとした老杉が茂つて薬師堂がある。その丘つゞきは見晴らしのいい所で、なたに小さい平原や追川をへだて、栗駒の駿峰が奥羽山脈のうちに巨大な姿を横へ

てゐる。こゝから見た一望の気分は最もよく築館村の気分を語つてゐる。静かな穏やかな古驛の土地、こゝに生れるものは山の搖籃に育つものである。雪が溶け、遠い山が青く輝き、米を舂く物置小屋の傍に梅が咲き鶯が啼き、御堂の中に喉を鳴らし居た鳩が暖かい日を浴びて飛立ち、人家ちかい庭に下りる。春の山にひねもす柴

を切る農夫は馬にそれを積んで夕方の村
をかへつてゆく、どこか眠たさうに機織る
音のする茅ぶきの家には桃の花が咲いて
ぬる。
夏は？ 秋は？ 冬は？ ひとつと吹き
入る風にも、一夜に積る四五寸の雪にもそ
れを彩る何等特異な年中行事のない土地
である。

只こゝに生れるものは山の搖籃に眠る
ものである。藍色に美しく煙る遠い山脈
に護もられてゐる山の子である。

雪の夜がたり

しんしんと一夜に積る雪の朝寒さきび
しい雪の夜の楽しみ。それは北の國に生れ
たものならでは知らぬ幸福である。冬の

夜にはよく夜學といふものがあつた、その頃學問といへば未だ漢文が盛んであつたので、近在での漢學者であつた私の父には、よく酒樽や何かを下げては自分の息子に明日から日本外史を教へてくれ等といふのがあつた。そして夜になると十二疊ほどの座敷には澤山の古ぼけた机が並べられて、小學校の上級生や卒業して家事の手

傳をしてゐる若者や三四人の女も交つて凡そ二十人ほども行儀よく並んだ、學問の程度によつて傍から一人か二人づゝ一冊の本を習つて居た、其の時外の人達はさきに習つた所を復習してゐるのである。日本外史や日本政記、四書或は易經、孝經等いふものもあつた。中には十五六歳で一里以上の山路を往復するものもあつた。今よ

り思ふと殆んど奇蹟と思はれるほど學問熱があつたのだ。

父は碌に本を見ずに殆んど暗誦的に教へて居た。ある晩のことである。一わたり勉強がすんで皆火鉢の近くに集まつて色々の話の末に、

「どうだ、こんな夜に薬師様の鐘がつけるか」

と一人が言ひ出した。もう十時過ぎで外は雪ふかい寒い暗夜である。高い石段をのぼつて鐘樓までは老杉の凸凹の路が五六丁もあるのだ。誰しもこの答に顔を見合はした。

「さうだね、行つた人にはみんな如何んなものでも御馳走するね」
と満場がかく叫んだ、すると一人が

「己れが行つてくる」

と毛絲の頸巻をくるくると巻いて出かけ
て行つた。十分！ 十五分！ 二十分！
間もなく鐘は殷々と鳴つた。三たび鳴つ
て止んだ。凡てが其の大膽に感服した向
ひの時計屋の小僧も豆腐屋の息子も税務
署の雇も、未來の水兵君も。

この薬師堂では年越の晩には村の家々

からの施米の御禮として、御堂の内を開け
放つて村の人達に甘酒の御馳走をするの
であつた、常に薄暗い御堂の裡はいつにな
く明るく燈明が點り、太鼓が鳴り、寺男が熱
い甘酒に人參・芋・焼豆腐の一串を添へて出
すのを純朴な人達はいかにも有難さうに
頂戴する。

御堂までの路は人が通るに従つて雪が

寒氣かんきと共に迂すり易やすくなつてゐる、一つの灯ともしびさへない路みちを、山やまは一面めんの雪明ゆきあかりではあるが、提灯ちやうちんを持つ人ひとも疎まばらに澤山たくさんの人達ひとたちが御お参まゐりするのであつた。

堂だうの中なかに相撲まふをする者ものもあれば、古ふるめいた佛像ぶつざうの御賓頭おびんづる廬ら様さまを持出もちだして力ちからくらべをするものもある、幼年えうねんのものが持ちあぐるを得うる最もつとも小ちひさいのと、中位ちゆうぐらゐのと、とても大おと

人なでも肩かたには上あげきれぬ大おほきいのとあつて、それが其その夜よに限り自由じゆうに持もてるのであつた。

「御賓頭おびんづる廬ら様さまを持もつと力ちからが出でる」

さう言いつては少年せうねん達たちが競きそつて、角かどもなく半なかば朽くちかけた重おもい佛像ぶつざうを持もち上げるのであつた。

「己おれはこれを持もてるぞ」

「えらいナ」

「何んだそんな小さいのか」

いろ／＼の聲がする。

一段高い所には容貌の嚴めしい佛像が四五個並んで居た。片腕の焼け焦げた佛像を指さして、

「この御佛様は御寺の火事の時に箒を持つてお手傳をしたさうだ」

といふと一人は熱心と好奇の眼を光らし
て、

「ウン、さうかれ」

と點頭いてゐる。婆さんも老人も娘も息子も皆この御堂に集まつて甘酒を御馳走になつてゆく。

村に降つた雪は屋根から落され、路からも両側に堆く集められ、それが溝の中を埋

めてゐるのが常であつた。田舎の習として
雨垂の落ちる下は溝になつてゐるのであ
る、その雪は半月も一月も解けずに残つて
ゐる時がある。

いつか戸の外に脱ぎ棄て、置いた牛乳
屋の時次郎の新しい靴が一方失くなつた、
それが一月も経つてから雪解けの中から
出て來た。だれかが深く突込んで置いた

ものらしかつた。

屋根には氷垂が見事に何本となく下つ
て中には二尺も三尺もあるのがあつた。先
づ腕ほどの太さから次第に細く先は刃の
やうに尖つてゐる。

いろは歌留多に厭きて外を見ると、冬の
薄日が窓に射して、外には氷垂が日に溶け
て、カタンカタンと凍つた土に落つる音。

厨房の方くちやばうに、みそさみそしいがチツチツと寂さびびしく鳴ないてゐる。

寒さむさが嚴きびしくなれば、苗代なはしろでも池いけでも、どこを渡わたつても危き険けんがない程ほどに氷こほりが張はる。すると翌朝よくてうは間まもなく少年せうねんが一つの大おほき池いけに、十人にんも二十人にんもが氷こほり迂すべりに忙いそがしいのだ。然しかし氷こほり迂すべりも、雪合戦ゆきがっせんも竹馬たけうまも雪ゆき達磨だるまもさほど變かはつた印象いんしやうを與あたへて居ゐない。

母ははの里さとは一里り足たらずの山奥やまおくにあつて高たか森もりといふ所ところであつた。その名ながよく表あらはしてゐるやうに人通ひとどほりのない丘をかつゞきの山路やまみちである。橋はしがあり淺あさい水みづに小ちひさい魚うをが泳およぎ柳やなぎが白銀毛ぎんまうの芽めをつける、斑まだらに殘のこつた雪ゆきのあとに落ふきの臺とうが見みえ、日ひあたりのいゝ土堤どてつゞきに野火のびの跡あとが鮮あざやかである。椿つばきの花はなが落おちこぼれてゐるなだら坂ざかに

かゝると、目にせまつて明るい竹藪が見える。この竹藪が見えるところ。この竹藪が見えるところ。私は安心した。遠いところを来た、そしてこの竹藪こそは母の家のすぐ傍のものであつたから。その家は煤けた高い天井で、梁の木は驚くほどの大木が用ゐられて居た。あがり口の戸は輻輳と音するといつてもいいほどの重い大きい扉であり、家内が十五六人

も居るのも珍らしかつた。私は決して泊らなかつた。泣いて泣いて無理に夕方、母を連れかへるのが常であつた、何となく寂びしい便よりの感じがしみぐするのである。

幸福の森

始めて小學校に入學したときの喜びは

譬へやうもなかつた。私は新しい鞆をさ
げて、其の鞆の中には讀本や習字のいろい
ろのものを入れ、新しい草履を持って家の
前に待つて居た。するとやはり今年入學
の從兄弟の賢吾さんが上町の方から坂を
驅けてくるのであつた、其の頃、六七歳まで
は頭の兩側と眞中を剃つて髪を長くして
居たので、その髪が房々と風に揺られて驅

けてくるのであつた。

矢張りその年、櫻が満開の時分に、薬師山
で運動會があつて、始めて旗取り競争をや
つた、夢中になつて驅けたが後から二三番
であつた。

ゆたかにめぐらされた幔幕が春のそよ
風に揺られて櫻がヒラヒラと散る、その下
で尋常三四年の女生徒が、

忠肝義膽のわが軍は

日出づる國の……

と歌ひ乍ら丁度舞踏のやうな手振をして
居た、文句は臙るに忘れても妙にあの歌の
調子は今でも口の端に上るのである、そし
てあの時の人達を輝く春の中の一幅の繪
のやうに思浮べる。

然し少年時代の幸福を追憶させるのは

學校ではない。學校以外の遊びの時であ
る。

私の兄の無二の親友の誠次さんは九州
屋の息子である。九州屋は私の家の筋向
ひの村一番の素封家である、先帝陛下御
巡幸の時の行在所もあつて、よく其室を拜
んだものだ。村の少年の大部分は凡ての
遊びを此の金のある、背景のある、そして應

揚やうな誠せい次じさんさんの下もとに行おこなつた。奥おくぶかい宏くわう壯さうな家いへの後うしろは、何なん千せん坪つばとも知しれぬ丘をかの上うへを
機い林ねばやしがめぐつてゐる。平へい地ちには倉くらあり物もの
置おきあり厩うまやあつて其その間あひだを池いけや畑はたけが點てん綴てつし
てゐる。

「今日けふは兵へい隊たいごつこをやるんだ」
すると忽たちまち三十にん人にんほどの少せう年ねんが集あつまつた、
そして或あるとき時は帽ぼう子しや勳くん章しやうを皆みなで繪えの具ぐや

金きん銀ぎんの紙かみを振ふりまはしては半はん日にちをつぶした
りする。兵へい卒そつの帽ぼう子しは畫がわ學がく紙しで造つくつた底そこ
なしの帽ぼう子しに黄きの太ふとい線すぢをひく、伍ご長ちやうのは
同おなじ帽ぼう子しに赤あかい太ふとい線せん。勳くん章しやうは金きんと銀ぎんと
があり、金きんは無む論ろん殊しゆ勳くん者しやに與あたへる金きん鷄しきん勳くん章しやう
である。そして帽ぼう子しに幾いく本ほんとなく金きん線すぢの
這は入いつてゐるのは南なん北ほく兩りやう軍ぐんの各かく司し令れい官くわんで
ある誠せい次じさんさんと私わたしの兄あにであつた。

三十人は二隊に別れて、竹の銃（掛で只カチネ仕でも鳴るやうに出来て居た、それ）を各々手にして司令（官自ら「氣を附け」「番號」「廻れ右」をやつて、二隊森の別方面に消えてゆく。

森は廣かつた。南北兩軍は演習でよく見るやうに、最も聰明なものを斥候として敵情を視察させる。もしも巧みに敵の背後に廻つて不意に全軍射撃をしたとすれ

ば勿論大勝利はこつちの物であつた。そしてカチンカチンでは物足らないので、同時に口で「ダン、ダン、ダン」と出来得るだけ大聲に叫んだものだ。もし兩軍白兵戦のやうな場合があると休戦喇叭が鳴つた。喇叭の上手なものも一人や二人は居た。ある時、斥候を務めた理髮屋の息子の小賢かしい宗治が、老木の間に積み重ねた柴

のかげに隠れて居た、かくとも知らぬ敵の
司令官の誠次さんが前を通りかゝつた、す
ると斥候の宗治は忽ち例の鐵砲を取直し
て「ダン」と言つた。

司令官は大いに驚いた、そして戦果て
後、

「これは中々敏捷だ」

といふ下に金鷄勳章を呉れた。

ある時各兵卒にその殊勳あるものを撰
賞した、然るに私には何の賞もなかつたの
で。

「もう止めた、止めた」

と大いに拗れて家に歸つて居た。すると

一兵卒が、

「銀の勳章をやるからございんといや」(來いな

といふ意味)

と迎むかひに來きたので、内ない々く大おほいに喜よろこんで、遊あそび々くと歸き隊たいした。正月しょうがつのカルタ、トランプ、三月むわつと五月ごがつの節せつ句く、さうした樂たのしい少年せうねんの團だん樂らんは凡すべて誠せい次じさんの家うちで行おこなはれた。
燒いねばやし林やしの大たい木ぼくの葉はが風こがらしに吹ふき散ちつて、白しろい壁かべにカかツと日ひが當あたる、靜しづかな温あたかい小こ春はる日ひだ。栗くり駒こま山やまに雪ゆきが白しろくなるのも間まもあ
るまい。

倉くらの中なかには木き彫ぼりの精せい巧こうな面めん、本ほん物ものの刀かたなが
いくらもあつた、日ひあたりのいゝ所ところに筵むしろを敷しいてはその面めんを被かぶり刀かたなを振ふつて神かみ樂ら踊どり
をやつた。然しかし太たい鼓こも鐘かねの鳴なり物ものも少年せうねんを
單たん調てうにせずには置おかなかつた。

「おゝわれこそはわれこそは素す盞ざん鳴なり尊そんに
て……………」
などゝ太ふとい造つくり聲こゑで物もの蔭かげから躍をどり出だして

も何遍なんべんとは續つづくものではない。
やがて勇敢ゆうかんな徒競争とぎやうさうが發議はつぎせられた。
「この森もりを二廻ふたまよりめぐつて見みろ」
すると十人にんほどもずらりと並ならんだ、小作人こさくじん
の子この平助へいすけ、荷馬車にばしゃひきの子この孝治かうぢ、活版屋くわつばんや
の甚三じんざう、魚屋さかなやの武小間物屋たけしこまものやの忠太郎ちゅうたろうなどい
ふのが誠次せいじさんの命令めいれいを王様わうさまの聲こゑのやう
に聞きいた。

「一等賞とうしやうには此繪このゑの澤山たくさんある太陽たいやう、二等賞とうしやう
には小國民せうこくみん、三等賞とうしやうには筆戰場ひつせんぢやう……」
そして「一ワン！二ツー！三スリー！」といふ合圖あひづで發足はつそくし
た。
森もりの路みちは七丁ちやうほど上下のぼりくだりするのであつた。
息いきをせい／＼して赤あかくなつての競争きやうさうはめ
でたくすんだ。そして賞品しやうひんは各優賞者かくしやうしやに
與あたへられた。

裏には大きい茶畑があつた、それが揃つて堅い實をつける頃の事である。蜜柑の空箱に小さい瀬戸の車をつけてそれに糸をつけて地を曳くやうにした。その箱を二つも茶畑に曳き込んでは、何人もて茶の實をそれに一杯にする、そして凱歌をあぐるものゝやうに、それをわざと小半里もある、稻を刈つた跡の乾いた田に行く、そし

てやはり兩軍に別れ極めて短距離の内で力強く投げ合ふ。顔に中たると可なりに痛いのだが、忽ち敵軍の一人の少年は着物を脱ぎ棄て、裸體で突貫して來た。「痛くないよ、何が痛いもんか」小間物屋の忠太郎だ、雨のやうに其の裸體に茶の實が降る。やがて茶の實が盡きると、稻を刈つた株

の残りのこを引ひき抜ぬいて投なげる、株かぶは無む数すうだ、株かぶ
は丁度ちやうど持もつに手頃てごろで、少すこし土どろがついてゐる
ので旨うまく遠とほくまで飛とぶのだ。

これは茶ちやの實みのやうに生なま優やさしくないの
で、兩軍りやうぐん稍やへ隔へりが遠とほくなるのであつた。呻うな
りをなして稻株いなかぶが飛とんで行ゆく。

小間物屋こまものやの忠太郎ちゅうたろうは片腕かたうでを顔かほに翳かざし、
片腕かたうでに稻株いなかぶを手てにしてまだ裸體はだかを止やめな

い。

大正五年二月廿五日印刷
大正五年三月一日發行

■ 著作權所有 ■

天葉詩集 定價參拾錢

著者 白鳥省吾

發行者 小池則之

印刷者 中野鐵太郎

發行所 新少年社

東京市牛込區矢來町四番地二舍書房內
電話番町四三六一六番
振替東京二六三七〇番

白鳥天葉著書目録

詩集 世界の一人
定價 六拾錢
送費 六錢

新少年文庫 槍の王様
定價 貳拾錢
送費 四錢

少年詩集 天葉詩集
定價 參拾錢
送費 四錢

(分る係に行發社本)